

隠岐民具データ集

木村 裕樹

凡例

- ・本データ集は国立民族学博物館の『標本資料目録データベース』、および旧財団法人日本民族学協会附属民族学博物館の『民具標本収蔵原簿』（神奈川大学日本常民文化研究所蔵）をもとに、標本資料の熟覧、および関連文献の点検調査をおこない作成したものである。紙幅の都合で A 表と B 表とに分割したが、両者は通番で対応している。

【A 表】

- ・標本番号、標本名は『標本資料目録データベース』の記載情報による。
- ・原簿番号、標準名、地方名、採集地、採集者、寄贈者、採集期、収蔵期、備考は『民具標本収蔵原簿』の記載情報による。ただし、すべての項目に必ずしも記載があるわけではない。
- ・網掛部は『民具標本収蔵原簿』に記載はあるが、『標本資料目録データベース』に登載されていない資料である。
- ・標本資料の画像は『標本資料目録データベース』で公開されているので参照されたい。<http://htq.minpaku.ac.jp/databases/mo/mocat.html>（2017 年 9 月 27 日閲覧）

【B 表】

- ・小林班所見は平成 28（2016）年 6 月 13 日と 14 日に国立民族学博物館において実施した調査において標本資料を熟覧した際の所見である。
- ・宮本馨太郎メモは、宮本馨太郎の調査時の自筆ノート（財団法人宮本記念財団蔵）から当該資料について記載のある箇所を抜粋した。
- ・隠岐手帖一は桜田勝徳の調査時の自筆ノート（慶應義塾大学文学部古文書室蔵）から当該資料について記載のある箇所を抜粋した。
- ・隠岐島前漁村探訪記は桜田勝徳・山口和雄編『隠岐島前漁村探訪記』（アチックミュージアム刊、1935 年）から当該資料について記載のある箇所を抜粋した。
- ・隠岐島の旅は高橋文太郎著「隠岐島の旅」（『ドルメン』第 3 巻第 8 号、1934 年）から当該資料について記載のある箇所を抜粋した。

解題

昭和 9（1934）年 5 月と昭和 10 年 8 月の二度にわたる隠岐調査で収集された民具は、旧財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）から移管された標本資料として、こんにち国立民族学博物館に受けつがれている。ただし、これらのすべてを確認することはできない。なぜなら、同館に収蔵されるまでに所在のわからなくなったものや、資料管理台帳と同定できずに未登録のまま

残されたものが少なからず存在するからである（飯田卓・朝倉敏夫編 2017）。したがって、隠岐で収集された民具は『民具標本収蔵原簿』上、78点を数えるが、実物資料と照合できたのは57点であった。

1) 昭和9年5月調査

昭和9年5月24日から27日にかけておこなわれた。渋沢敬三、桜田勝徳、小川徹、早川孝太郎、宮本馨太郎、高橋文太郎、村上清文、磯貝勇の8名で島前、島後の各地をめぐっている（神奈川大学日本常民文化研究所編 2012）。調査の記録として、「宮本馨太郎メモ」と「隠岐手帖一」が残されているが、活字化されたのは「隠岐島の旅」のみである。これは高橋の視点で記述されているものの、旅程を追うことのできる唯一の文献である。

収集された民具をみると、足半草履を含む履物の点数が最も多く、労働着や運搬具、漁具は比較的まとまっているといえる。ただし、これらが体系的に収集されたものであるのか、判断するのは難しい。しかし、「宮本馨太郎メモ」、「隠岐手帖一」、「隠岐島の旅」を参照すると、調査の途上で見聞きした特徴的な民具が意識的に集められていることがわかる。とくに運搬具は「隠岐島の旅」において詳述されているばかりか、前年に磯貝と高橋がともに運搬にかんする論考を発表しており、2人の関心が想起される（磯貝 1933・1938；高橋 1933・1934）。

採集者についてみると、岩井亀千代とあるほかはA・M同人と表記されている。そして、半数以上の民具は岩井が集めたものとなっている。この人物について、国立民族学博物館の標本資料の中から採集地も採集期も不明であるが、岩井の収集した「大型背負籠」（標本番号H0021715、原簿番号11791）がみつかった。『民具標本収蔵原簿』の備考欄に「「松江市、文化自動車株式会社、岩井亀千代」と荷札にあり」とあることや、複数の民具を広域的に収集していることから、岩井は調査に同行した自動車運転手であり、かつ土地の事情に精通した人物であった可能性が高い^註。そこで、あらためて採集者と収集された民具との対応関係をみると、A・M同人とあるものは足半草履や背中当など比較的持ち帰りやすい小物であることに気づく。これらは調査者一行が現地で直接集めたものであろう。一方、岩井亀千代とあるものは現地で直接入手できなかったもの、あるいは持ち帰ることのできなかつた大型のものと思われる。たとえば、漁具のワービカキとメバリヤスは採集期が昭和9年5月28日、水筒のユヅツは昭和9年5月29日と記載されていることから岩井に頼んで、後日、送付してもらったものと推察される。備考欄に「岩井亀千代氏報」、「岩井氏報」とあるのはその証左といえるだろう。

2) 昭和10年調査

昭和10年8月12日から23日にかけて島前で、桜田勝徳、山口和雄、岩倉市郎の3名によっておこなわれた（神奈川大学日本常民文化研究所編 2012）。その成果は『隠岐島前漁村探訪記』に報じられている。同書の序によると、「本年四月同地の安達和太郎氏が上京の折、同氏より沖縄の糸満漁夫が今夏出漁するとの談に接したので、之を機会とし此漁業と島前漁業の調査を目的として此地に旅行した」と調査の経緯が述べられている。しかし、その内容は漁業にとどまらず牧畑を中心とする農業経営や信仰生活にもおよび、島前の社会経済を総合的に記録したものとなっている。

収集された民具をみると、漁具が大部分を占めるが、チャブチャブ、チャトガタと呼ばれる墓参に用いる桶と柄杓、足半草履や背負袋なども集められている。採集者は桜田勝徳と山口和雄の連名、A・M同人、安達和太郎である。一方、寄附者は安達和太郎、平木由太郎、小泉金太郎、道根竹市である。『隠岐島前漁村探訪記』の序をみると、これら協力者について簡単な紹介がある。

黒木村船越の安達和太郎はこの調査におけるカウンターパートであり、調査者一行は8月12日から17日まで同家に滞在、「漁業実況見学及び調査」に従事した。安達家は「旧藩時代に長崎物俵物を取扱った御用商人の家柄で、現在、島前切っでの漁業企業家として活躍」。「和太郎氏は六十歳、元県会議員にもたれた」人物である。同じく黒木村船越の平木由太郎は「半農半漁民として最も経験ある」人物、浦郷村本郷の小泉金太郎は「漁業に練達した人々」の一人で「六十幾歳」、海士村豊田の道根竹市は同地の「有力者」で「六十幾歳」の人物である。

参考文献

飯田卓・朝倉敏夫編

2017 『日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告139）国立民族学博物館

磯貝勇

1933 「物を容れ運ぶ器のことなど」『民俗学』第5巻第9号

1938 「背負梯子について」『民族学年報』第1巻

神奈川大学日本常民文化研究所編

2012 『アチック写真 vol. 6』神奈川大学日本常民文化研究所

桜田勝徳・山口和雄編

1935 『隠岐島前漁村探訪記』アチックミュージアム

高橋文太郎

1933 「運搬用具の採集」『民俗学』第5巻第9号

1934 「奄美十島及び大島に於る民具一主として運搬具と仕様法一」『旅と伝説』第7年8号

1934 「隠岐島の旅」『ドルメン』第3巻第8号

山口和雄先生古稀記念誌刊行会編

1978 『黒潮から塩の道まで—研究史的回顧—』財団法人日本経営研究所

【参考 URL】

一畑グループ「沿革」

<https://www.ichibata.co.jp/group/history/1st.html>（2017年9月27日閲覧）

注

「文化自動車株式会社」は現在の一畑電気鉄道株式会社が昭和21（1946）年5月までに吸収合併した会社の一つである（一畑グループホームページ）。

【A表】

通番	標本番号	標本名	原簿番号	標準名	地方名	採集地	採集者	寄贈者	採集期	収蔵期	備考
1	H0016646	仕事着 (山袴： 股引き)	4207	ジバン?	パッチ	島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	岩井亀千代	採集者	昭和9年5月25日		
2	H0016647	背負い運 搬具(背 中当て)	4209	背中當	セナコ・ サイワイ	島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	A・M 同人		昭和9年5月25日		
3	H0016648	仕事着 (袖なし 上衣)	4208	貫頭型 労働服	クビスキ	島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	岩井亀千代	採集者	昭和9年5月25日		
4	H0016649	耕作用具 (はなずる)	4211		ハナズル	島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	岩井亀千代	吉田荒男	昭和9年5月25日		耕作用(岩井 亀千代氏報)
5	H0016650	袋	4212		ツカリ	島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	岩井亀千代	吉田荒男	昭和9年5月25日		農具。
6	H0016651	藁沓	4213	藁沓		島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	岩井亀千代		昭和9年5月25日		
7	H0016652	藁沓	4214	藁沓		島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	岩井亀千代		昭和9年5月25日		
8	H0016653	かんじき	4215	輪樑	ユキワ	島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	A・M 同人		昭和9年5月25日		雪輪
9	H0016654	仕事着 (はんで ん)	4216		ツヅリ	島根県 周吉郡 東郷村 大字 大久	A・M 同人		昭和9年5月26日		労働着
			4217	延縄の 碇	ハエナワ のイカリ	島根県	A・M 同人		昭和9年5月25日		
			4218	背中當	セータカ	島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	A・M 同人		昭和9年5月25日		背中当
			4219	背中當	セータカ	島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	A・M 同人	岩井亀千代	昭和9年5月25日		
10	H0016655	運搬具 (背負い 梯子)	4220	背負梯子	カルイ	島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	岩井亀千代	木戸喜代市	昭和9年5月25日		
11	H0016656	わらじ用 爪掛け	4221	藁沓	ワラゲツ	島根県 周吉郡 中條村 大字 原田	岩井亀千代		昭和9年5月25日		ワラジの上 に使用する。

通番	標本番号	標本名	原簿番号	標準名	地名	採集地	採集者	寄贈者	採集期	収蔵期	備考
12	H0016657	足半草履	4222	足半草履	アシナカ	島根県周吉郡中條村大字原田	A・M 同人	岩井亀千代	昭和9年5月25日		
13	H0016658	牛用口籠	4223		クツゴ	島根県周吉郡中條村大字原田	岩井亀千代	吉田荒男	昭和9年5月25日		耕牛用。
			4224			島根県周吉郡中條村大字原田	岩井亀千代		昭和9年5月25日		牛の鼻ずるに穴をあけるもの(岩井亀千代報)
14	H0016659	背負い袋	4225	背負囊	ニオヒツカリ	島根県穩地郡都万村大字歌木	岩井亀千代		昭和9年5月25日		背負籠属(挿図)
15	H0016660	草履	4226	草履	ゾーリ	島根県穩地郡都万村	A・M 同人		昭和9年5月24日		
16	H0016661	わらじ	4227	草鞋	ワランジ	島根県穩地郡都万村	A・M 同人		昭和9年5月24日		
17	H0016662	足半草履	4228	足半草履	アシナカ	島根県周吉郡東郷村大字大久	A・M 同人		昭和9年5月26日		
			4229	足半草履	アシナカ	島根県知夫郡黒木村大字別府	A・M 同人		昭和9年5月25日		
18	H0016663	足半草履	4230	足半草履	アシナカ	島根県周吉郡中村大字中村	A・M 同人		昭和9年5月26日		
			4231		カガミ	島根県	岩井亀千代				
19	H0016664	アワビ採り用鉤	4232		ワービカキ	島根県穩地郡都万村大字津戸	岩井亀千代	岩井清	昭和9年5月28日		鮑をとる専門のカギワービカキとは土地のなまりアワビカキの□なり(岩井亀千代氏報)
20	H0016665	漁業用やす	4233		メバリヤス	島根県穩地郡都万村大字津戸	岩井亀千代	岩井清	昭和9年5月28日		メバリと云ふ小魚を突きとるヤス一名魚ツキヤスとも云ふ。(岩井氏報)
			4234		ササエヤス	島根県	岩井亀千代				
21	H0016666	漁業用やす	4235		ヒノリヤス	島根県	岩井亀千代				
22	H0016667	テングサ採集用具(棒、紐)	4237		テンツキ	島根県穩地郡都万村大字津戸	岩井亀千代	岩井清			天草採集器(岩井亀千代氏報)
			4238		メノハカギ	島根県	岩井亀千代				
			4241		チシ	島根県	岩井亀千代		昭和9年5月28日		

通番	標本番号	標本名	原簿番号	標準名	地方名	採集地	採集者	寄贈者	採集期	収蔵期	備考
23	H0016668	竹筒(栓付き)	4242		チヤダル	島根県知夫郡浦郷村大字三度	岩井亀千代		昭和9年5月24日		A・M同人? (37・2・3記)
24	H0016669	水筒(湯入れ用)	4243		ユヅツ	島根県周吉郡中條村	岩井亀千代	採集者	昭和9年5月29日		湯筒
25	H0016670	足半草履	4244	足半草履	アシナカ	島根県知夫郡浦郷村大字三度	A・M同人		昭和9年5月24日		
26	H0016671	足半草履	4245	足半草履	アシナカ	島根県知夫郡浦郷村大字三度	A・M同人		昭和9年5月24日		
27	H0016718	蒸籠 用台	4299		コシキノワ	島根県周吉郡中條村大字國分寺	A・M同人		昭和9年5月25日		餅蒸し用。
			4300		ヨリ	島根県周吉郡中條村大字原田	岩井亀千代	吉田荒男	昭和9年5月25日		
28	H0016737	花立て	4324	花立		島根県海士郡海士村	A・M同人		昭和9年5月25日		
29	H0016738	魚入れ籠	4325		ビク・アユカゴ	島根県周吉郡中條村大字原田	A・M同人		昭和9年 ^(ママ) 4月25日		
30	H0016742	熊手	4329		サデマ	島根県	A・M同人		昭和9年5月25日		
			4330		サデマ	島根県知夫郡浦郷村大字三度	A・M同人		昭和9年5月23日		
31	H0016745	重り	4333		ツネゴ	島根県周吉郡中條村大字原田	岩井亀千代	吉田荒男	昭和9年5月25日		
			4336		シホタガ	島根県知夫郡浦郷村大字三度	A・M同人	中谷いは	昭和9年 ^(ママ) 4月24日		藻の名称、ジンバ或はモバ。
32	H0017295	漁具(糸巻き具)	5489	糸巻	イトマキ	島根県知夫郡黒木村大字船越	桜田勝徳・山口和雄	安達和太郎		昭和10年8月20日	綱糸をすく漁具(綱と纏の糸をまく)(旧い附札より)
33	H0017296	竹筒	5490		アグリヅツ	島根県	桜田勝徳・山口和雄			昭和10年8月20日	
34	H0017297	ひしゃく	5491		チヤブチヤブ	島根県知夫郡黒木村大字船越	桜田勝徳・山口和雄	安達和太郎		昭和10年8月20日	チヤトタカの柄杓。墓では潮水をつかはず清水。
			5492		鳥賊トリハンチキ	島根県	桜田勝徳・山口和雄			昭和10年8月20日	
			5493		タラシ	島根県	桜田勝徳・山口和雄			昭和10年8月20日	

通番	標本番号	標本名	原簿番号	標準名	地名	採集地	採集者	寄贈者	採集期	収蔵期	備考
35	H0017298	筵編み用針	5494		ムシロバリ	島根県知夫郡黒木村大字船越	桜田勝徳・山口和雄	安達和太郎		昭和10年8月20日	
36	H0017299	筵編み用針	5494		ムシロバリ	島根県知夫郡黒木村大字船越	桜田勝徳・山口和雄	安達和太郎		昭和10年8月20日	
37	H0017300	釣針	5495		ゴンガラ	島根県知夫郡黒木村大字船越	桜田勝徳・山口和雄	安達和太郎		昭和10年8月20日	鳥賊ツリ具 餌をつけないでつる方
38	H0017301	釣針	5495		ゴンガラ	島根県知夫郡黒木村大字船越	桜田勝徳・山口和雄	安達和太郎		昭和10年8月20日	鳥賊ツリ具 餌をつけないでつる方
39	H0017302	釣針用藁筒	5496		ゴンガラカケ	島根県知夫郡黒木村大字船越	A・M 同人	安達和太郎		昭和10年8月20日	
			5497		アグリ	島根県知夫郡黒木村大字船越		平木由太郎		昭和10年8月20日	
40	H0017303	釣針	5498		ゴンガラ	島根県				昭和10年8月20日	
41	H0017304	釣針	5498		ゴンガラ	島根県				昭和10年8月20日	
42	H0017305	釣針	5498		ゴンガラ	島根県				昭和10年8月20日	
43	H0017306	釣針	5498		ゴンガラ	島根県				昭和10年8月20日	
44	H0017307	釣針	5498		ゴンガラ	島根県				昭和10年8月20日	
			5499		ゴンガラ	島根県知夫郡黒木村大字船越	桜田勝徳・山口和雄		昭和10年8月	昭和10年8月20日	
45	H0017312	背負い袋	5504		ノツツツカリ	島根県知夫郡黒木村大字船越	桜田勝徳・山口和雄	平木由太郎		昭和10年8月25日	苔ツミツカリの意。カゲチとも云ふ。藁縄にて編みたる背負囊。
46	H0017313	容器(桶)	5505		チャタガ	島根県知夫郡黒木村大字船越	桜田勝徳・山口和雄	安達和太郎	昭和10年8月17日	昭和10年8月25日	墓地用。四十年前に造る(明治二十七年)。安達家先代(武雄氏)の葬の時造った。チャブチャブで水を汲む(竹の柄杓)。
47	H0017314	ざる	5506		コザキ	島根県知夫郡黒木村大字船越	桜田勝徳・山口和雄	平木由太郎		昭和10年8月25日	
48	H0017316	足半草履	5508	足半草履	アシナカ	島根県海士郡海士村大字豊田	桜田勝徳・山口和雄	道根竹市		昭和10年8月28日	ヲトコ結び。

通番	標本番号	標本名	原簿番号	標準名	地方名	採集地	採集者	寄贈者	採集期	収蔵期	備考
49	H0017317	篝火用台	5509		カマタ	島根県知夫郡浦郷村	桜田勝徳・山口和雄	小泉金太郎		昭和10年8月28日	地曳網夜漁に於て篝火を焚く台に用ひる。知夫里村に於ては之をカマリダイと稱してゐる。カガタについてゐる網の結び方は？ムスビである。(桜田勝徳氏解説)
			5652		ケンガラ	島根県	桜田勝徳・山口和雄		昭和10年8月25日		
			5700		オトシ	島根県	安達和太郎			昭和10年10月10日	漁具
50	H0017507	水入れ容器	5701		水樽	島根県知夫郡黒木村	安達和太郎	全人		昭和10年10月10日	漁民及び農民の使用する水入。
51	H0017508	足半草履	5702	足半	アシナカゾウリ	島根県知夫郡黒木村	安達和太郎	全人		昭和10年10月10日	
52	H0017509	足半草履	5703	足半	アシナカゾウリ	島根県知夫郡黒木村	安達和太郎	同人		昭和10年10月10日	
53	H0017510	イカ釣り用具(釣針、籠)	5704		カガラ	島根県	安達和太郎			昭和10年10月10日	漁具
54	H0017511	アワビ用鉤	5705	鮑カギ		島根県知夫郡黒木村	安達和太郎	安達和太郎		昭和10年10月10日	鯨鰓を附し且つ長き竹を取付けるものとす。鮑を取る漁具。
			5706		トンボ	島根県	安達和太郎			昭和10年10月10日	
			5707		底ゴンガラ	島根県	安達和太郎			昭和10年10月10日	
55	H0017512	釣針	5708		カブセ	島根県	安達和太郎			昭和10年10月10日	
			5709	海敷		島根県	安達和太郎			昭和10年10月10日	
56	H0020326	藁打ち用槌	10283	横槌(ワラタタキ)		島根県周吉郡中條村大字原田	木戸喜代市				津戸方面ニテハヨコ口ト云フ
57	H0021637	しめ縄	11699		スゲノシメ	島根県周吉郡東郷村大字大久	A・M 同人		昭和9年5月26日		三組。
	H0021715	運搬具(背負い籠)	11791	大型背負籠			岩井亀千代				木の枝を以つて骨組みをし、藁縄で編んだ籠。是に藁製背中当及び背負ひ縄を装置したものの。「松江市、文化自動車株式会社、岩井亀千代」と荷札にあり。

[B表]

通番	小林班所見	宮本馨太郎メモ	隠岐手帖一	隠岐島前漁村探訪記	隠岐島の旅
1	前身頃生地(裏側に染め抜き面)に「ペーラ」/防水布 益田商店」と染め抜きあり。	「池田一原田間」 「パッチ(モモヒキの事)」 「パッチは普通のモモヒキとは違ふらしい」 【参考:五箇村字山田】 「パッチ 長い、紐あり」	「野良着の襦袢に襟が首の下までしかなし 襟の端に紐がついてをり、之を結んであるものがある。(撃剣のけいこ着や鎧下らに似たもの)」 【挿図】		「この道に添うて八尾川が流れて居る。當村原田から池田の間の澤には田圃が拓かれてゐて、恰度植付前なので、田に出て働いてゐる者が多い。男はジバン(襦袢型の労働着)を着てパッチを履き牛に鋤を曳かせてゐる。」 (p. 47)
2	未使用か。「宮本馨太郎メモ」に図あり。法量:600×330ミリメートル。	「五月二十五日/中條(スズ)村原田/セナコ、サイワイ、ソデナシに似て居る。後が一巾で/前は一寸位。仕事に着る。【挿図】セナコ」「セナコ【挿図】」			
3	「宮本馨太郎メモ」に図あり。	「クビヌキ」【挿図】 「サシコ」「ツヅリ」「縞」	「クビヌキ 頭から被る サイワイに似たもの。」 【挿図】		
4	ハナズルのわか部分と通番36のムシロバリの素材は同一の木材。		「ハナズル 牛のハナグリ」		
5			「ツカリ スカリの事」	「第七部 語彙」(p. 180)に「ツカリ 東國のコダシ西國のカバリ、ホヅロに類する縄を編んで作つた運搬用の背負袋の名。船越では之に辨當ツカリ、ノツツンツカリ、ダゴエツカリの三種があり、ノツツンツカリは磯に海草採取にゆく時に使用してゐる。ダゴエツカリが三の内最も形が大きく、之に駄肥を入れて牛馬の背にのせるに用ゐる(船越)」とあり、「語彙附圖」(p. 182)にツカリの図あり。	「尚、ツカリへ竹筒(茶入であらう)や辨當などを入れ運ぶ男もあつた(挿図 A5)。」 (p. 47)
6	脛部分が開閉。紐で綴じるブーツ型。口縁部に手ぬぐいを使用。				
7	脛脛部分が開閉。				
8	「宮本馨太郎メモ」に図あり。番線で巻いてある。足を乗せる部分は紙のような紐で出来ている。	「原田にて/ワ。(カンヂキ)/ユキワ。 【挿図・寸法入】/材料スギ」	「ワ(ユキワとも) 輪カンヂキの事(竹の輪、稲藁製)」		「尚、當地には子供自製のスキー或は爪のない輪標、キウマ等のある事を見たが、此等については他日機會のある時述べるとしたい。」 (p. 48)
9	もじり袖。「宮本馨太郎メモ」(p. 33)に描かれているツヅリは『アチック写真 vol. 6』に掲載(男性着用)。	「ツヅリ 【挿図】」 「採集品、」 「ツヅリ. 三円五十匁/東郷村大久鳥居信助。」			

通番	小林班所見	宮本馨太郎メモ	隠岐手帖一	隠岐島前漁村探訪記	隠岐島の旅
10	破損あり(破損部と本体を針金で結んである)。法量：950×400ミリメートル。		「オイコ(又はカルイ)カルイの丸いシカタをセイトカといふ。オイコには正円形のものが多い。尤も長円形のセイトカもある。それを天保型といふ。椎の木製。セイトカの天保型は多くオイコを使用せず唯荷擔の時に用ゐる。その荷繩をニカワといふ。」【挿図】		「今日も快晴。宿屋の前の通りを農家の人達が牛を連れて鋤をカルイ(背負梯子)で擔ぎ乍ら田圃へ向かつて行く。荷車に堆肥を積んで行く者もある。」(p.47)「當地には尚、運搬具として大變面白いものがある。カルイと呼ぶ背負框には後に手が出てゐて、之をツメ又はツノと呼んでゐる。第六圖がそれで、材は椎、背中當としてセータカと呼ぶ天保銭型或は卵型のものを著けておく。全長九三糎、上幅四一糎下幅四三糎(何れも横框の處で)、背中當の径二八糎。この木框が南の島、奄美十島で用ひてゐるものと呼名が同じで、且つ下廣の上窄まり、その反りの工合と云ひ手のある點、又は錢型、卵型の背中當を用ひる點など大分似通つた處がある。九州本土の南部山村地方にも此の型と類似の木框があつて、キカルイなどと呼ばれてゐるやうである。」(p.48)
11	未使用か。			「第七部 語彙」(p.181)に「ワラグツ 雪靴。冬水汲みにゆく時などに用ゐる靴形の雪靴(船越)」とあり。	
12	未使用か。		「足中 ワラと木綿とで女 ラナゴムスビ 男ムスビは近頃採用せぬ」【挿図】		
13	牛用か。		「クツゴ イナクワズの事」		
14	アケビ蔓またはマタタビ蔓製か。		「ニオイツカリ(ツバラ製)之は都万より原田に到る途中の峠ウタ辺りで使用する」と。【挿図】	「第七部 語彙」(p.180)に「ツカリ 東國のコダシ西國のカバリ、ホバロに類する繩を編んで作つた運搬用の背負袋の名。船越では之に辨當ツカリ、ノツツンツカリ、ダゴエツカリの三種があり、ノツツンツカリは磯に海草採取にゆく時に使用してゐる。ダゴエツカリが三の内最も形が大きく、之に駄肥を入れて牛馬の背にのせるに用ゐる(船越)」とあり、「語彙附圖」(p.182)にツカリの図あり。	「隣郡都萬村歌木から當地へ用足しに來た男は、ニオイツカリを呼ぶカツラ(蔓)製の背負囊を負うてゐた(挿圖B7)。中には空硝子燻を一杯に詰めて居た。中條村の都萬目といふ山間の小部落では矢張り繩編のツカリを見たが、之にはチ(乳)が七箇附いてゐて、口を止める一米三〇糎の紐がつけてあつた(挿圖B8)。囊の長さ六四糎、深さ四二糎。之を負ふのは別のニナワを用ひるとの事だつた。」(p.48)
15	未使用か。				
16	未使用か。資料についている札には「草履」と記載されている。				
17	未使用か。大久収集は行程上5月27日。	「採集品、/アシナカ、二朶五厘/東郷村大久、田尻理一」			
18	未使用か。				
19	残存する柄部分は竹製。		「アワビカキ 筑前のヒキオコシに近似した漁具」		
20	展示中。メバリとはメバルの事か。松江に使用例あり。				

通番	小林班所見	宮本馨太郎メモ	隠岐手帖一	隠岐島前漁村探訪記	隠岐島の旅
21	「ヒノリ」は不明。重量1キログラム超。参考資料として湯梨浜町泊歴史民俗資料館に数キログラムある重い「ヒラメ用落としヤス」がある。カナギ漁のときに水底に商品価値の高いヒラメを発見した場合、落としとして突きヒラメを仕留めた。重量がないと深い場所の獲物はしとめにくかったという。三つ又の先端部分の内、かえしが折れている1本には故意か、経年か不明だが不自然な鉄の剥離が見られる。				
22	付属の紐・札(2点。「式」【表面】「2」【裏面】、「四」【表面】「4」【裏面】と記載あり)は保谷時代に付けられた札か。紐8点。柄部分のみか。接合部2ヶ所あり。隠岐郷土館に同名参考資料あり。				
23	焼印「天」。底面に竹ひごを「井」型に組んだ細工あり。補強のためか。		「チャダル 椎葉村のヨギリの太く短いもの。但し唯の竹筒である。その使用はヨギリに等しい。」		「同部落の間瀬静夫といふ家には、山仕事に行く時お茶を入れて持参するチャダルといふ圓筒型の茶入器があった。約七合は這入つて二、三人が飲み合へると云ひ、落した時に底の抜けないやうにと底面には竹編の蓋が著けてある。自製品で材料は同村珍崎の苦竹である。」(p. 43)
24	本体側面に「湯筒 ユツツ 隠岐中条村 9・5・27」と墨書あり。				
25	未使用か。				「三度部落の濱に下りると、その渚にクサツマリといふ労働着を着てアシナカ(足半草履)を履いた男(第二圖)が、頻りにモバ(海藻)を蒐めて居た。」(p. 43)
26	未使用か。				「三度部落の濱に下りると、その渚にクサツマリといふ労働着を着てアシナカ(足半草履)を履いた男(第二圖)が、頻りにモバ(海藻)を蒐めて居た。」(p. 43)
27			「コシキノワ ヘワの事。蒸籠の台輪。」		
28	掛花入、自立しない。紐に装飾性がある。器用な人が作ったものか。				
29	未使用か。売り物のような感がある。				
30	未使用か。小型。		「サデマ スクドを掻きよせる熊手。此辺りでは松落葉は重要な燃料である。」		

通番	小林班所見	宮本馨太郎メモ	隠岐手帖一	隠岐島前漁村探訪記	隠岐島の旅
31	菰編み台で使ういわゆる「ツチノコ」。ただし2点しかない。山桜製か。		「ツネゴ ツ、ロの事」		
32	竹で輪を作りその上に糸を巻く。			「第七部 語彙」(p.178)に「イトマキ 釣糸を巻く杵、漁具 (船越)」とあり。	
33	隠岐郷土館の台帳によるとアグリはアバリか。			「第七部 語彙」(p.178)に「アグリ 漁網を編む網針。之を入れる筒をアグリツツといふ (船越)」とあり、「語彙附圖」(p.182)にアグリとアグリツツの図あり。	
34				「第五部 信仰生活」(p.149)に「シヲタガとチャトタガ (中略) 船越では毎朝夕墓参りする人が多かった。此時バケツを持ってゆく者も少くはなかったあ、手桶を持って行く人もある。之をチャトガと言ひ、以前は之を一つは持ってあぬ家はなかった。チャトタガ (ママ) は自家に葬式がある時にのみ新調し、朝夕之に清水を入れて墓参し、チャブくと呼ぶ竹の柄杓で此水を墓に掛けてある (安達武夫)」とあり。	
35	竹製。				
36	木製。				
37				「第二部 漁業」(p.48)に「ゴンガラ カバラとも言ふ。烏賊を釣る道具で二種ある。一は餌をつけて釣るもの、他は餌を用ひぬものである。前者は竹をけづり經二分、長さ約三寸五分位の棒にしたものの先端に針金を十本程一所にしその先きを錨の如き形に曲げたものをつけた漁具である。後者は中部が少々太くなった長さ三寸くらいの鉛の棒の先きに十二、三本の針金を一所にしその先きをやはり錨形に曲げたものをつけた漁具で鉛の棒には白布が巻きつけてあるものもある。上圖の如くである。右は船越で採集してきたゴンガラを標準として述べたが、浦郷、菱、其他に於ても大した構造上の差異はなかったと思はれる。唯、昔は右のやうな比較的精巧なものではなく、古釘の長いのを四五本三、四ヶ所ほど竹の皮で結んで一所にし、其先に十本内外の針金をつけ錨形に曲げたものを使用したとのことだ。(ヒラキヤ老人談)」とあり。	

通番	小林班所見	宮本馨太郎メモ	隠岐手帖一	隠岐島前漁村探訪記	隠岐島の旅
38	巻いてある布地は絹。針9本。ゴンガラからトンボへの移行過程資料として重要。			「第二部 漁業」(p. 48)に「ゴンガラ カバラとも言ふ。鳥賊を釣る道具で二種ある。一は餌をつけて釣るもの、他は餌を用ひぬものである。前者は竹をけづり經二分、長さ約三寸五分位の棒にしたものの先端に針金を十本程一所にしその先きを錨の如き形に曲げたものをつけた漁具である。後者は中部が稍々太くなった長さ三寸くらいの鉛の棒の先きに十二、三本の針金を一所にしその先きをやはり錨形に曲げたものをつけた漁具で鉛の棒には白布が巻きつけてあるものもある。上圖の如くである。右は船越で採集してきたゴンガラを標準として述べたが、浦郷、菱、其他に於ても大した構造上の差異はなかつたと思はれる。唯、昔は右のやうな比較的精巧なものではなく、古釘の長いのを四五本三、四ヶ所ほど竹の皮で結んで一所にし、其先に十本内外の針金をつけ錨形に曲げたものを使用したとのことだ。(ヒラキヤ老人談)」とあり。	
39	ゴンガラを差して保管整理か。				
40	形体はイカ釣り用釣り針。針9本。				
41	形体はイカ釣り用釣り針。				
42	金属製(錘付き)。形体はイカ釣り用釣り針。針9本。				
43	金属製(錘付き)。形体はイカ釣り用釣り針。針9本。				
44	形体はイカ釣り用釣り針。針9本。				
45	編み目が細かい。			「第七部 語彙」(p. 180)に「ツカリ 東國のコダシ西國のカバリ、ホヅロに類する縄を編んで作った運搬用の背負袋の名。船越では之に辨當ツカリ、ノツツンツカリ、ダゴエツカリの三種があり、ノツツンツカリが磯に海草採取にゆく時に使用してゐる。ダゴエツカリが三の内最も形が大きく、之に駄肥を入れて牛馬の背にのせるに用ゐる(船越)」とあり、「語彙附圖」(p. 182)にツカリの図あり。	

通番	小林班所見	宮本馨太郎メモ	隠岐手帖一	隠岐島前漁村探訪記	隠岐島の旅
46	本体側面に2箇所印刻(焼印か)(いわゆる入山に「ニ」または「三」)あり。常民研所蔵映像の潮汲みの桶はシオタガ。			「第五部 信仰生活」(p.149)に「シヲタガとチャトガタ(中略)船越では毎朝夕墓参りする人が多かった。此時バケツを持ってゆく者も少くはなかったあ、手桶を持って行く人もある。之をチャトガと言ひ、以前は之を一つは持ってゐぬ家はなかった。チャトタが(ママ)は自家に葬式がある時にのみ新調し、朝夕之に清水を入れて墓参し、チャブくと呼ぶ竹の柄杓で此水を墓に掛けてゐる(安達武夫)」とあり。	
47	用途不明。			「第七部 語彙」(p.179)に「コザキ 磯の海苔を採取して籃の中に入れる。この竹籠をコザキといふ(船越)」とあり、「語彙附圖」(p.182)にコザキの図あり。	
48	未使用か。				
49				「第二部 漁業」(p.39)に「鯷地曳は十月以降は夜篝火を焚いて行ふのが常であったが、この篝火は昔はコテ松を使用しカマタの上で焚かれた。今度アチックに採集してきたカマタは浦郷村本郷の鯷地曳のもので三十年前松江から購入し、網大工をつとめた小泉金太郎氏の所有せるものであった。重量三貫の左圖の如き形をした漁具で、もちろん鋼鐵製である」とあり、カガタの図(p.40)あり。	
50	焼印なし。				
51	未使用か。				
52	未使用か。資料についている札には「足半」と記載されている。				

通番	小林班所見	宮本馨太郎メモ	隠岐手帖一	隠岐島前漁村探訪記	隠岐島の旅
53	ゴンガラと縄籠は別物。縄籠にある延縄用釣糸は天然テグス使用か。縄は麻糸に柿渋を塗布。未使用か。延縄の針は先に特徴ある曲がりがあり、タイ用、ハマチ用に類似。			「第二部 漁業」(p.48)に「ゴンガラ カッラとも言ふ。烏賊を釣る道具で二種ある。一は餌をつけて釣るもの、他は餌を用ひぬものである。前者は竹をけづり經二分、長さ約三寸五分位の棒にしたものの先端に針金を十本程一所にしその先きを錨の如き形に曲げたものをつけた漁具である。後者は中部が稍々太くなった長さ三寸くらいの鉛の棒の先きに十二、三本の針金を一所にしその先きをやはり錨形に曲げたものをつけた漁具で鉛の棒には白布が巻きつけてあるものもある。上圖の如くである。右は船越で採集してきたゴンガラを標準として述べたが、浦郷、菱、其他に於ても大した構造上の差異はなかったと思はれる。唯、昔は右のやうな比較的精巧なものではなく、古釘の長いのを四五本三、四ヶ所ほど竹の皮で結んで一所にし、其先に十本内外の針金をつけ錨形に曲げたものを使用したとのことだ。(ヒラキヤ老人談)」とあり。	
54	柄部分は鋸で切り取られている。カナギ漁用か。鯨鯨は「鯨のひげ」と推定。				
55	ゴンガラ状の釣針。全長190ミリメートル。ゴンガラより柄が長い。				
56	側面に「津戸方面ニテハヨコ口ト云フ」と墨書あり。		「ヨコヅチ 藁うち槌」		
57	二組。二股状のしめ縄で、一方はしめ始めは右廻りだが10センチメートルほど進んだ部分から三つ編みに変化する。もう一方は全体に三つ編みである。備考の「三組」は「三編」か。大久取集は行程上5月27日。				